

日本農林漁業振興会会長賞受賞

浦々の連携と多様な主体の参加による交流を核としたむらづくり

とくてい ひ え い り かつどう ほうじん
受賞者 特定非営利活動法人

かまえ ブルーツーリズム研究会 けんきゅうかい

おおいたけん さいきし
(大分県佐伯市)

地域の沿革と概要

大分県の南東部に位置し宮崎県に隣接する佐伯市は、平成17年3月に佐伯市と蒲江町を含めた南海部郡5町3村が合併し、903km²という九州一広い面積の市となった。九州山地が沈水してできたリアス式海岸で風光明媚な海岸線は約200kmにおよび、日豊海岸国立公園に指定されている。

江戸時代、この地域を領有した佐伯藩(二万石)は、藩内を「在方(農村地域)」「浦方(漁村地域)」「両町(城下町)」の3つに分けていたが、「佐伯の殿様、浦でもつ。」といわれるほど海産物が豊富な「浦方(漁村地域)」の存在は大きかった。その中心となったのが藩南部の浦々、蒲江の浦々だった。

明治22年、蒲江の12の浦では、上入津村、下入津村、蒲江村及び名護屋村の4村が発足した。さらに、昭和30年には、上入津村、下入津村、蒲江町及び名護屋村が合併して蒲江町が誕生した。

むらづくりの概要

1. 地区の特色

蒲江町にはJRがなく、かつては国道もなかった。隣の佐伯市から蒲江町に行くには標高400m前後の山地を抜けなくてはならず「陸の孤島」といわれた地域である。

第1図 位置図



白地図 KenMap の地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容	
世帯数等 (内訳)	総世帯数	3,397戸
	漁業経営体数	277戸
	漁業就業者数	665人
漁業経営体数 (内訳)	個人経営	223戸
	専業	112戸
	兼業	111戸
	会社	54戸
主要漁獲量	海面養殖ぶり類	9,163t
(漁業種類別)	定置網等ぶり類	196t
(魚種別)	潜水器漁業等貝類	64t

さらに、浦から浦への移動も困難で、特に町の東端にある西野浦の人々は昭和39年の西野浦トンネルが開通するまでは渡し船で移動していた。昭和31年の県道佐伯蒲江線轟トンネルの開通、51年の国道388号線畑野浦トンネルの開通により、佐伯市中心部と蒲江町はようやく1時間弱で移動できるようになった。

蒲江町には大分県漁協4支店があり、海も4区域に分かれている。漁業権を巡る争いでは、明治中期に10年以上にわたり浦と浦が争った「弥次郎貝騒動」が最も有名である。

弥次郎貝とはバカ貝・アオヤギのことで、かつて入津湾では20年から30年周期で大量繁殖し、沿岸の人々が争って捕っているうちに消滅することを繰り返していた。

明治13年頃、入津湾の畑野浦の人々と同じ湾の西野浦・楠本浦・竹野浦の人々との争いが始まり、最後は裁判となった。漁師の仕事は「板子一枚下は地獄」といわれるほど危険であり、「沖で頼れるものは自分しかない。」とされる。

漁業が基幹産業であり、「陸の孤島」といわれた蒲江町は、永年にわたって「独立自尊の精神」が根付き、浦毎にコミュニティや伝統・文化も形成された地域でもある。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

平成4年、大分県は蒲江町竹野浦に、海洋に関する学習活動やスポーツレクリエーションの拠点施設として「大分県マリンカルチャーセンター」を建設した。

消費者の魚離れ、漁価の低迷、従事者の高齢化など水産業を取り巻く厳しい状況が長く続く中で、来訪者との交流を通じて蒲江町の自然や産業を守ろうとする意識も地域に生まれてきた。平成8年、同町西野浦で水産業、民宿業等を営む橋本氏が蒲江町観光協会会長に就任する。橋本氏は、これまでも地域の水産業を守るために水産業と観光業を結合させる事業を展開していたが、「伊勢えびまつり」や「JR蒲江町グルメ列車」等のイベントを実施しながら住民と来訪者との交流を推進した。

橋本氏は、交流の推進と併せて「蒲江町には独立自尊の精神が根付き、浦々にはリーダーと多様な技能・個性を持つ住民がいる。水産業の将来が不透明な状況の中では、これまでのように浦毎の独立国家ではなく連邦共和国になることが必要。」と考え、何かの時には浦と浦や異業種間が協力しあえる地域（連邦共和国）づくりを進めた。蒲江では、個々の技能・個性を生かして地域づくりに活躍する人々を「現地芸能人」と呼んでいるが、立派な芸名を持った現地芸能人が数多く生まれた。

平成18年1月、地域の基幹産業である漁業や農業を活性化させることを基本にブルーツーリズムの取組を実践する「かまえブルーツーリズム研究会」が橋本氏を会長に発足した。そして、地域内の各種団体との連携をより一層強化し、ブルーツーリズムの研究や事業を継続・発展させるため、平成20年8月に「特定非営利活動法人かまえブルーツーリズム研究会（以下「BT研究会」）」となった。

(2) むらづくりの推進体制

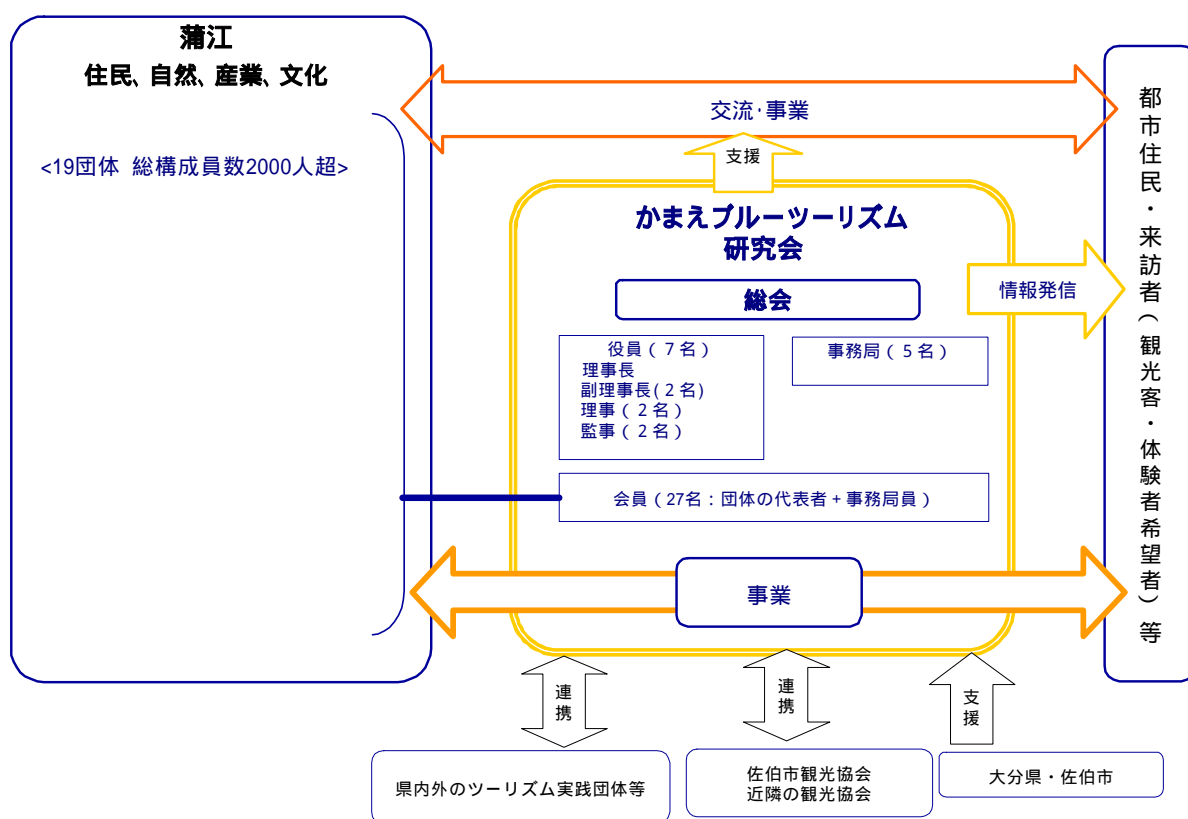
ア 組織体制

現在、BT研究会の会員は27名であり、役員は理事長を含めて理事5名と監事2名、職員は事務局長1名で構成されている。

会員は、漁業者、水産加工業者、道の駅の運営会社、女性団体、環境団体、神楽保存会、社会教育団体、地域づくり団体などの様々な団体の代表者である。B T研究会での指示・決定事項は、会員が所属する団体の指示系統で伝わることとなり、これらの団体の総構成員数は2,000人以上で、蒲江に住む4人に1人がB T研究会の活動に関っている。

B T研究会の事務局は大分県マリンカルチャーセンター内にあり、指定管理者制度により同センターの施設管理を行っている業者の職員のうちの5名がB T研究会事務局と兼務している。

第2図 むらづくり推進体制図



イ 主な活動内容

水産業等の支援活動（あまべ渡世大学・浦々軒々まつり等）
うらうらのきのき

B T研究会は、19年度にこれまでの活動を集大成したブルーツーリズムの学び舎「あまべ渡世大学」を開校し、蒲江全域を大学のキャンパスに見立てて様々な体験・学びの講座を実施している。各講座（体験メニュー）の講師陣は、蒲江を愛し蒲江で生きている「浦の伝道師」が務めている。

20年度からは、佐伯市観光協議会佐伯ツーリズム推進協議会の構成組織として、「子ども農山漁村交流プロジェクト（農林水産省、文部科学省、総務省）」を実施しており、21年度からは「田舎で働き隊！事業（農林水産省）」で研修生も受け入れている。

「漁師も、生産するだけでなく、消費者に覚えてもらう努力をしなければ、利益を得られない。また、覚えてもらう場合に地域名、地域イメージというのが重要だ。」との意識が生まれ広がりつつあり、百貨店等での対面販売や産地PRに生産者が直接参加するケースが増えている。

蒲江には他地域に比べ漁業での若手後継者が多いが、地域ブランドづくりによる漁業の6次産業化の方向性がきちんとあることも、大きな要因の1つとなっている。また、研究会の活動を牽引している業者は、

6次産業化により顧客を獲得して業績を伸ばしており、雇用者数も増加している。



写真1 「あまべ渡世大学」の講師メンバー

第2表 あまべ渡世大学の講座数と体験者数

年度	H17	18	19	20	21
講座数	9	10	11	14	21
体験者数(人)	406	662	2,841	4,807	6,246

伝統・文化の伝承活動（おばちゃんバイキング）

蒲江全域を対象としている女性グループである「蒲江地域婦人団体連絡協議会」と「蒲江女性セミナー」は19年度に「おばちゃんバイキングの会」を結成し、イベントや「あまべ渡世大学」の講座に合わせて、浦々に伝わる伝統料理、船の上で食べられている漁師料理等に、料理や海の生業に関する話を添えてバイキング形式で提供している。

おばちゃんバイキングは、これまで浦毎に伝えられてきた食文化が交流する場となり、蒲江全域の女性で浦々の郷土料理を伝承していく場となっている。そして、高齢者にとっては生きがいの場ともなっている。

第3表 おばちゃんバイキング利用者数 (単位：人)

年度	H19	20	21(見込み)
利用者数	791	1,779	2,313

環境美化活動（海岸清掃等）

テレビ大分（TOB）との共催で「マンボウの海・元猿海岸清掃プロジェクト」事業を実施するなど、都市住民の参加を得ながら海・景観等の保全・美化にも取り組んでいる。これまでは身近にありすぎて、普段の生活では見落とされがちな蒲江の海の素晴ら

しさを改めて再認識し、大人も子どもも蒲江の素晴らしい海を、「未来へ残さなければならぬ大切な宝」として考えるようになった。

さらに、海岸清掃活動にとどまらず、地域内の美化をさらに進めるため、展望公園において「野路菊」の植栽活動が実施される等、地域全体の取組へと広がりもみせている。

浦の案内・PR活動

「あまべ渡世大学」の実施とともにBT研究会の会員や現地芸能人は、それぞれの事業、役割の中で、蒲江を広くPRしている。

道の駅「かまえ」は、20年度の東九州自動車道佐伯ICの供用や今年度の高速道路無料化社会実験により利用客が増加しているが、マリンカルチャーセンターとともに来訪者にとっての浦の案内所となっている。

来訪者が浦々の生産者の軒下を訪ね、旬の食べ物をじっくり味わい、各種体験が楽しめる祭りで、毎月第4日曜日に開催される「浦々軒々まつり」では、道の駅「かまえ」とマリンカルチャーセンターが発発点となっている。BT研究会は佐伯市観光協会と連携しながら、「浦々軒々まつり」の実施とともに新たな観光周遊プランを研究している。

第4表 蒲江の観光客数の推移

(単位：人、千円)

年 度	H17	18	19 (推定値)	20 (推定値)
観光客総数	690,900	731,612	739,785	753,242
日帰り客数	652,878	690,100	701,534	713,700
宿泊客数	38,022	41,512	38,251	39,542

資料：大分県調べ

むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

本地域は、12の「浦」を単位としてコミュニティが形成され、その地理的条件と漁村社会の特性から、浦々の相互関係が希薄であったが、本組織の活動により、地域住民の一体感が生まれるとともに、多様な業種にまたがる会員たちの効果的なPR活動を可能にした。来訪者の増加を消費者ニーズ把握のための機会として積極的に活用する取組は、都市と農山漁村の交流による活性化をめざす地域にとって、模範となる事例である。

2. 漁業生産面における特徴

研究会の活動を通して、「漁師も、生産するだけでなく、消費者に覚えてもらう努力をしなければ、利益を得られない。また、覚えてもらう場合に地域名、地域イメージというのが重要だ。」との意識が生まれ広がりつつある。また、漁業と観光業等が連携する本地区の6次産業化・地域ブランドづくりの取組が、養殖技術の開発、若手漁業後継者の育成等につながっている。



写真2 若手漁業者

3. 生活・環境整備面における特徴

「あまべ渡世大学」の開校により、受講者等を受け入れる水産会社や民宿等で新たな雇用も生まれている。地区の女性が受講者等に浦々の伝統料理と海の生業の話を添えて提供している「おばちゃんバイキング」は、新しい収入の場になるとともに、浦々の食文化の交流・伝承の場であり、高齢者の生きがいともなっている。

「あまべ渡世大学」や海岸清掃活動等をおして、住民は地区の美しさ、環境保全の大切さを再認識している。

また、研究会が行政等と連携しながら取り組んできた観光客、交流人口を増やす活動は、かつて「陸の孤島」といわれた地域での道路整備の推進にもつながっている。



写真3 おばちゃんバイキング